

◇ 巻 頭 言 ◇

反 省 と 前 進

浅 海 重 夫

お茶の水地理は今年20号を迎えるが、これまでの巻頭言でしばしば(1)女子大学の目的、(2)国立大学の使命、(3)(明確な表現ではないが)女子が大学で学ぶことの意義などについて論述され、さらに(4)地理学の理念、(5)本学地理学科の存在理由(特色)に関連して(6)本誌刊行の意義が述べられた。われわれはそれぞれの問題を真剣に考え、時に反省し、新たな前進のための検討を加えてきた。

国立女子大学の意義づけについて、個々の教官に多様な考えがあり、全学的にコンセンサスが得られないままに、3年前から女子のみを対象とする博士課程が発足している。女子が安心して研究できる場を、憲法違反は承知の上で国立大学の1つくらいに作ってもよいだろうとの考えは、男子優先のゆがんだ社会風潮に由来する雑音をさけることによって、女子が研究に専念できるというのであれば納得しよう。しかし、学際的な事象に総合的な視野からとりくませようという本学独得のねらいは、目下のところ院生にその研究成果を期待するのみで、教官側の体勢は必ずしも総合的研究プロジェクトを展開するに至らず、試行錯誤しながら従来の研究姿勢を維持しつづけているのではあるまいか。

ここで地理学の本質に思いをいたせば、地理学こそは正に原理的に総合の学であり、地理学は地域現象を対象とする総合研究コースといえる。本学の人間文化研究科の理念に最も近い姿勢をとりうるのが、われわれ地理学科の人間のはずである。しかし再びまた反省と煩悶の境地に到達する。地理学界における研究の多くが、自然地理学と人文地理学とを問わず、視野のせまいいわゆる〇〇地理学と称する〇〇学に偏しているのではないだろうか。重要なのは地域現象を解明する地理学的思考であって、そのためには総合的視野が必要とされる。1つの〇〇学の知識と方法だけでは解明できない困難さの故に、地理学が原理どおりに実践され難い結果をきたしたように思われる。本学地理学科の卒業生諸姉の多くは、幸か不幸か地理学研究者の道を進まないのが実情なので、研究者としてこのような苦労は味わわずにすむかもしれない。しかし地理学的思考はどの学野分野でも望まれる有用なものの見方であることを知り、卒業生諸姉がここで学んだ地理学的思考をもちつづけながら社会のムステル(模範)となってくれたら、本学地理学科の存在意義は大いに認められることであろう。

最後に本誌刊行の目的について改めて一考したい。本誌は卒業生の卒論を世に公表することと、卒業生の交流の場を作ることを目的として始められた。この両面はいわばかなり相異なる性格を蔵している。その後お茶の水地理談話会の発足した数年前から、卒業生の談話会発表者の報文を加えることによって、アカデミックな内容をもつ同窓会機関誌としての役割を果たすことになった。ここで卒業生諸姉に要望したいのは、研究活動をつづけている少数に限られた諸姉だけでなく、できるだけ多くの卒業生に、多様な職場のそれぞれで、また家庭生活の折にふれて、偶感し思考し研鑽したことについて、積極的に寄稿していただきたいことである。あるいは既刊分の卒論修論要旨や随想近況などに読後評や感想を寄せられるのも、交流を深めるのに役立つことであろう。このようにして本誌がより多くの卒業生に読まれ、書かれ、利用されることを願っている。